

七

月をもつて塾が開校した。草刈り作業に向かう先には経営者や元経営者もいて、つい話の流れで塾を始めるのだと言ってしまうことがある。

「それで生徒はどうやって募集するかね。」

さすが経営者だ。収支の見通しが立っているのかがまず気になるようだ。

「まあ、あんまり集まりすぎてもかえって困りますからね。口コミで徐々に広がればいいかな、と。」

経営者の眉間にしわが寄る。これだから世間知らずの学校の先生は、と出かかっているのがわかる。

「は。それで今何人集まったかね。来月にはオープンすーでしょ？」

「ええ、今のところゼロです。」

説教する気にもならなかったらしい。ぼくが参考までにと渡したチラシにチラツと目をやって、

「まあ、私の知り合いに話しとくわ。」

それ以上何も言わなかったが、経営者は塾長であり、ぼくは彼の意向を受けて自分のできる協力をするという立場である。塾長はじめそろそろって利潤を追うという意識が薄弱だから、敏腕経営者にあきれられってしまった。

最初から飛ばせないもう一つの理由は、教室が来年

度にならないと準備できないという事情があった。それまでの試運転期間は仮教室で運営しなければならぬ。塾長が打診してきたのは、築六十年超の我が実家である。確かに祖父が亡くなって、取り憑かれたように片付けをして、がらんとしてはいるのだが。あちこちゆがんでいて直さないと住めないよなあ、と放置していた代物だ。まあ実際に見てくれ、とても使い物にならないから、と言ったのだが、見た途端、「ここでやります」と塾長は決めてしまった。

塾生が来る気配がないので、ずつとぐずぐずしていたが活活寄席をきつかけに友人の口入で体験教室の応募があった。あわてて片付けや掃除をした。襖も外して二間続きの六畳を開け放って座卓を据えてみると、萩で見た松下村塾もこんな感じだったと思いついた。畳も障子も珍しくなってしまう今の子どもたちが座布団に座って勉強するのもいい経験になるかもしれない。落語にはびつたりだし。

まさかと思つた落語教室の体験希望もあった。小咄を教えて、高座のまね事をしてみた。小学生姉妹の落語に保護者と塾長とぼくで拍手喝采した。もし落語の塾生が誕生したら、稽古を開放して近所のお年寄りたちに見てもらおうと思つた。内容とは関係なく岡本かの子の小説のタイトル家霊、という言葉が浮かんだ。



空き家 15
木幡智恵美

生家の思い出②

出雲の家に帰省した際の記憶で、鬱蒼とした庭、怖い便所、黒くて高い天井と共にうっすらと残っているのが風呂だ。おぼろげな記憶だからかなり小さい頃だったと思うが、恥ずかしく感じる歳にはなっていたのだろう。庭にどんと置いてあるドラム缶のようなものだった。下から焚きつけるようになっていたのか、お湯を入れただけなのか全く覚えていない。ただ、生垣に囲まれていたとはいえず、戸外ですっぽんぽんになって入るのが恥ずかしくなかったことだけはしつかり覚えている。大人もそうして入っていたとしたら、何とおおらかな時代だったことだろう。いつまでそのドラム缶があつたかも分からない。いつのまにか、裏庭に小屋が建ち、五右衛門風呂になっていた。

田舎へ帰る道中が長かつたことも覚えている。大阪といつても、泉南だから和歌山の方が近い。まずは南海電鉄の黒田駅まで歩き、電車で難波へ向かう。通天閣が見えると降りる準備をした。難波から、もう一つ電車だか地下鉄だかに乗り換えて大阪駅まで移動するのが難儀だった。人ごみの中をあちこち連れ回されるのは辛かつたが、大荷物を抱えた父や母に文句は言えない。大阪駅で汽車に乗り込むとほつとした。ところが、そこから出雲までが長い。朝早く出ても、夜暗くなって着くから十時間くらいはかかつたと思う。尼崎駅に停まると、「武おつつあんがおるところだ」と言ったり、「ふくちやまあ」のアナウンスが流れると、変な地名だなと思つたり。トンネルを通過する時は、服に煤のようなものが付くので、トンネルが来る度に窓を閉めていた。途方もなく長い時間を汽車の中で過ごすのは退屈だった。ただ、一つだけ楽しみだったことがある。帰省の際にしか味わえない物が食べられたことだ。まずは駅弁。駅弁に付いてくるお茶の入れ物が気に入って、いつも持ち帰った。当時なかなか口に入らなかったバナナも、甘いミルクキャラメルも、この時には食べられた。それと、夏に帰省することが多かつたので、冷凍ミカンにもありつけた。

朝出ても、出雲の家に着くのは夜だ。どこの家にも車がある時代ではない。暗い中を、駅からはタクシーを使って帰るしかなかつただろう。かなりの距離、高かつただろうな。

30代フリーター 安倍晋三が銃撃、殺害されて1年たった永田町の様子を朝日新聞が次のように伝えていた。

「政界では『安倍氏だったら、こうしていたはずだ』との言葉が飛び交う。安倍氏の『幻影』はいまも政治に影響を与えている」（7月9日朝刊）。その代表的な例として挙げているのが、LGBT理解増進法案に対して「安倍さんは、この法案によって社会が分断されることを懸念していた」などとして安倍派をはじめとした自民党の保守系議員が反対し続けたことだ。
年金生活者 もし彼が生きていたら、今の自民党を彩る安倍カラーがこれほど濃くなっていったかどうか疑問が残る。非業の死は人を神格化することがあるからだ。

死は生の個性性を離れて普遍性に向かうことを意味する。自然死の場合、その移行はなだらかだが、非業の死、不慮の死の場合は断層的な移行となる。そのぶん生の個性性に対する死の普遍性がきわだち、死者はより神に近づく。

長谷川慶太郎はデフレを「買い手に極楽、売り手に地獄」と言い表した。

モノやサービスを安くふんだんに手に入られ、しかも賃金の下方硬直性に助けられて給料が下がらないデフレは国民にとってはインフレよりも都合な状態だ。これに対し、企業のほうは買い手をつなぎとめるために利益の縮小を強いられ、しかもイノベーションのための投資を続けないと、小さな利益さえあげることができないので、1日も早い「デフレからの脱却」を願う。

そんなデフレに肯定的な民主党政権に霞が関は抵抗した。官僚は自らの存立基盤である資本主義の意思に背くことはできない。「国の総予算207兆円を全面組み替え」などもつてのほかということになる。それは新たな財政支出をしないで行政サービスを拡充するという宣言であり、需要を抑制するデフレ路線にほかならない。

30代 民主党は「ムダをなくせば財源はいくらでもある」とホラを吹いて政

づく。

30代 安倍亡きあとの岸田政権について政治学者の御厨貴が朝日新聞のインタビューで「政治が奇妙に『行政化』され、躍動感が失われた」と語り、次のように指摘している。「良きにつけ、あしきにつけ、安倍氏の政治は、彼なりのイデオロギーや思い入れに深く彩られていました。その根っこにあったのは、戦後体制を否定することでした」「それに対して岸田氏は状況追従型でやらなければならないことをただ進めているようです。そこには情熱も深い思い入れも見えません。これは理想を掲げる本来の意味での政治ではなく、行政のやり方です」（7月8日朝日新聞デジタル）

年金 資本主義の高度化とともに市民社会の力が増大し、そのぶん国家の力が相対的に低下していることが「行政化」の背景にある。安倍が目指したのは、そんな国家に力を取り戻させることだった。それを実現するために彼が選んだのが富の再分配と国防という国

権を握り、それが国民にバレて政権を失ったという批判が繰り返された。

年金 それはホラでもなければ、実行不可能なことでもなかった。抵抗する霞が関を押し返すことのできる理念と行動力を民主党政権が欠いていたということだ。

家の2大機能を強化することだった。

前者はアベノミクスとして、後者は集団的自衛権の行使の一部容認を始めた軍備の強化として具体化された。その推進力となったのが「彼なりのイデオロギーや思い入れ」（御厨）であり、「その根っこにあった」のが「戦後体制を否定すること」（同）だった。

30代 安倍政権は歴史の中にもどう位置づけられることになるだろうか。

年金 安倍政権の使命は、民主党政権のデフレ路線を否定し、インフレを再来させることにあった。デフレでは利潤をあげにくい資本主義というシステムが与えた使命だった。アベノミクスは国民には都合のいいデフレを退治すべき悪者に仕立てるのに成功した。

2009年の政権交代時の民主党のマニフェストにある「国の総予算207兆円を全面組み替え」「税金のムダづかいと天下りを根絶」は、大がかりな金融緩和と財政支出を進めたアベノミクスとは対照的なデフレ路線と言っている。

そのつまずきに乗じて政権に返り咲いた安倍晋三は「デフレからの脱却」を経済政策の柱に据え、資本主義システムの意思に忠実なアベノミクスを押し進めた。その結果、円安を招き、輸出企業を潤わせ、雇用を拡大し、それが国政選挙での全勝につながった。

民主党政権がデフレ路線でほとんど成果をあげることなく退場したことが、安倍政権には追い風になった。もし民主党が当初の路線を貫いていたら、「買い手に極楽」、すなわち政権交代時のスローガンだった「国民の生活が第1」の経済に近づいていた可能性がある。それは少なくとも今のようなインフレよりましなはずだ。

だが、旧民主党の後身の立憲民主党がとっているのはインフレ路線だ。その空白を埋めるように、「身を切る改革」を掲げる日本維新の会が「税金の無駄遣いをするな」と、旧民主党や、さらにさかのぼれば小泉政権のデフレ路線の名残りとどめる主張を展開して勢力を拡大している。

ニュース日記 885
中村 礼治

安倍政権とは何だったのか